九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

陳冷血の翻訳小説『生計』に対する一考察

国, 蕊
九州大学大学院比較社会文化学府 : 特別研究生

https://doi.org/10.15017/1462143

出版情報：中国文学論集. 42, pp.81-95, 2013-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

陳冷血の翻訳小説『生計』に対する一考察

国　蕊

一　冷血重訳『生計』の提起する問題

陳冷血（一八七八―一九六五）、本名は陳景韓、江蘇松江（現在の上海市）の出身。「冷血」は筆名。一八九九年末から一九〇二年にかけて日本に留学し、帰国後、新聞界に入って、『時報』『新新小説』『申報』等の主筆を歴任し、ジャーナリストとして活躍した。一方、小説の創作と日本語からの西洋小説の重訳にも取り組み、清末民初の上海各新聞雑誌に多くの作品を発表した。また、林紓（一八五二―一九二四）の翻訳小説が主に二流、三流の通俗小説であったとしばしば指摘されるのに対して[1]、冷血による翻訳は世界一流の小説家の代表作がよく選ばれている。「俄屈華夫著」と署名された『生計』もその一つである。

『生計』は一九〇九年十月一日、冷血の主筆した『小説時報』に発表された短編小説である。「俄屈華夫著」と署名されているが、底本・原作についての説明は無い。樽本照雄氏の『新編清末民初小説目録』において、はじめて『生計』の原作者がチエーホフだと判明したが、さらに張艶氏の論文「陳冷血両篇翻訳小説的日語底本」によって、明治時代のロシア文学翻訳者、瀬沼夏葉（一八七五―一九一五）の翻訳した『余計者』が底本であることが明らかになった。さらに張氏は、日本語の底本と中国語の訳本の梗概と表現を比較して、「日本訳本更忠実原著、冷血的訳本有很多刪節[2]」と指摘する。『余計者』は一八八六年にチエーホフによって創作された短編小説であり、また、十九世紀のロシア文学に共通している人物像でもある。「余計者」の用語はツルゲーネフの『余計者の日記』（一八五〇）

によるもので、後に『ルージン』で典型的に描かれることとなる。それは十九世紀半ばのロシア文学に現れた、知性と教養にめぐまれながら、活かす場を見だせず、無気力で現実を直視し適応する能力を欠けた人物、没落貴族や知識階級の一典型である。[3]「余計者」類型の代表作はレールモントフの『現代の英雄』（一八四〇）、ゲルツェンの『誰の罪』（一八四六）、ツルゲーネフの『ルージン』（一八五六）、そして、チェーホフの『余計者』（一八八六）等が挙げられる。

瀬沼夏葉の『余計者』は原作の忠実な翻訳であったが、冷血は重訳に際して、何故多くの削除を施したのか、また何故タイトルを雰囲気、意味の異なる『生計』に改変したのか。本稿は、冷血の『生計』と底本（瀬沼訳本）とを比較し、冷血が度々加えた改変の過程を具体的に検証した上で、その意図を考察したいと思う。

二『生計』の翻訳

この作品の梗概は次の通りである。

主人公ザイキン（冷血訳：柴根）は市内区裁判所の役人である。妻の意見で購入した郊外の別荘に妻と息子を住まわせているが、自分は通勤費節約のため、滅多に家へ帰らない。ある日、退勤後、ザイキンは自分の別荘へ出かける。しかし、妻は晩飯も作らないまま、友人等とともに劇場へ出かけ、家には息子一人しか残されていない。息子は遊びに夢中で、ザイキンを気にもとめない。ザイキンは怒っていても、何も言わない。夜、妻は友達を連れて帰宅し、久しぶりに会う夫に簡単な挨拶をして、ザイキンにお金をもらって食べ物を買い、友達にご馳走した。食後、妻は再び、友達と歌を練習し続けたので、うるさくてザイキンは寝られない。深夜、妻は友達を泊めようとして寝ているザイキンを起こし、書斎の長椅子に寝なさいという。ザイキンは腹を立てるが、何も言わずに書斎に入り、長椅子に横になっている息子を見て、「お父様と貴様は余計者だから……なあ、眠る所も無いのだわッ！」と嘆いて家を出る。

以上が『余計者』の筋である。つまり、下級文官であるザイキンの生活の断片を描くスケッチ風の小説である。

生活に苦しんでおり、家族にも疎外されているザイキンの生活の様子および「余計者」とされる内面描写が小説の主眼となっている。『生計』の筋立てと表現は瀬沼夏葉による『余計者』にほぼ一致しており、瀬沼訳をもとに重訳されたものであることは疑いない。しかし、大筋では底本に忠実でありながら、実は冷血自身の筆によるところも数多く存在している。以下、冷血の加筆を【a削除】、【b添加と改変】という二つに分けて、具体例を挙げながら、分析を行っていきたい。本稿で使用したテキストはすべて初出のものである。『生計』は『小説時報』第二号の原本（北京師範大学所蔵本）、『余計者』は瀬沼夏葉訳『露国文豪：チエホフ傑作集』の原本（一九〇八年十月、獅子吼書房出版、国立国会図書館デジタル化資料 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/897048）をそれぞれ使用した。併せて、現代中国語訳の『契訶夫文集』第五巻（汝龍訳、上海訳文出版社、二〇〇八年）所収の『余計者』を適宜参照した。本稿における引用文は、文意を損なわないかぎり、旧字体を新字体に改め、ルビを省略する等の改変を適宜加えている。また、引用文の傍線は筆者による。

【a 削除】

【例1】ザイキンが別荘に帰ろうとする場面

底本：包、折鞄、婦人の附属品を入れたるボール箱等を、各各手に提げ、腋に抱へて、誰の顔も一様に空腹で腹立しさうで、緑の草も、清き水も自分等の為では無いとでも云ふやう。（一六七頁）

訳本：有乘客三三五五提着小包携着小筐大概帯着婦人家用品的東西都上了車向近邊村落避暑地走去。（一頁）（拙訳：乗客たちは三々五々鞄を提げたり、箱を抱えたり、婦人用品を持ったりして汽車を降り、近くの別荘地に向かう）

〈分析〉底本の「誰の顔も一様に空腹で腹立しさう」という文は通勤している下級文官たちの苦悶の表情、心身ともに疲れている状態を描いている。「緑の草も、清き水も自分等の為では無い」という文はザイキン達が別荘の自然とは無縁で、部外者のような存在である生活実態と心理状態を暗示している。これはザイキンが通勤同様に別荘生活を「実に下らない」、「悪魔だの、婦女輩が考出した業」、「懲役か、地獄か、這麼場所に来ると、息苦しくて、暑苦しくて、堪ったものぢや有りません」と非難する言葉と呼応しており、「余計者」イメージの最初の表出

であるといえよう。ところが、冷血の訳本では、此の文が削除されている。

【例2】別荘につく場面

底本：彼は家に入つたが、内は沈閑として、蚊の啼く声と、蛛の巣に引掛つた蠅の音許り聞える、窓にはレースの帷が垂れてゐて、ゲラニの咲き切つた花が真紅に見える、板の儘で塗らぬ壁の上には、見るも寂しげに蠅が居睡をして居るのである。（一七〇頁）

訳本：走進他自己的避暑宅内向裡邊一看，宅中十分沈静，只聴得蚊聲蠅聲，除外別無一點聲息。（一頁）（拙訳：自分の別荘に入って、内を見ると、わが家はとても静寂で、蚊と蠅の音が聞こえるだけだ。）

〈分析〉蛛の巣に引掛った蠅、垂れている帷、咲き切った花、板の儘で塗らぬ壁、寂しげに居睡りをして居る蠅など、ザイキンの眼にする家の風景はどれも生気がなく、死さえも連想させる凄惨な光景である。それは一つ一つの景色の特徴をとらえようとする描写ではなく、退屈で寂しく、生命力に乏しいという抽象的な隠喩を込めた詠嘆であり、生活に呑みこまれるザイキンの憂鬱な心情を投影しているとも考えられる。冷血の訳本では、この描写が削除されている。そのため、底本の抒情性、メタファーを失った。

【例3】晩飯についてのザイキンと息子の会話①

底本：（息子の話―筆者による）「私牛乳飲んだよ、私にッて牛乳六銭買つたの。お父様、あの其れぢや蚊は何為血を吸ふの？」ザイキンは肝臓に酷く刺激を覚えた。残念で残念で、居ても立つても堪らず、（略）、我と我が胸を撫で下し、グゲノトの歌の一節を暴になつて歌ひ出す。（一七二頁）

訳本：児道我今夜飲了牛乳買了六十銭得牛乳来飲了…阿父那蚊蟲他為何要吸人的血。柴根聴了這話心中甚有感触，忽然従那椅子上立了起来，走了幾歩又復坐了下去，（略），自己安慰著自己唱著一節哥慨奴歌。（二頁）（拙訳：息子は言う、「私は今夜、牛乳を飲んだ。六十銭で牛乳を買って飲んだ。お父さん、あの蚊は何で人の血を吸うの。」ザイキンはこの話を耳にすると、感慨ひとしおで、突然そこの椅子から立ち上がり、何歩か歩いてまた座り込んだ。（略）自分を慰めて、一節のグゲノト歌を歌いだす。）

〈分析〉底本では、ザイキンは息子に誰が晩御飯を作ってくれるのかと聞いたら、息子はご飯を作る人はない、自

分で牛乳を買って飲んだと返事した。その後、父親ザイキンに関心を寄せずに、すぐ「蚊」の話題に転換した。そのため、息子に「蚊は何為血を吸ふの」と聞かれると、ザイキンは反射的に「肝臓に酷く刺激を覚え」て、精神的なショックを受けた。「ザイキンは肝臓に酷く刺激を覚えた」という文は息子に無視されるザイキンの痛ましい内心の感覚を生き生きと描写している。息子との会話を通して、ザイキンの「余計者」イメージは強調されている。冷血訳になると、この印象的な心理描写が削除され、「甚有感触」の一語で総括された。より平易で分りやすいが、底本の心理描写の強烈な抒情的な色あいと隠喩の意味がなくなる。

【例4】晩飯についてのザイキンと息子の会話②

底本：ザイキンは立つて書斎に行き、長椅子の上にごろりと横になり、両手に頭を抱へながら考へる。子供の涙は彼の心を和らげて、怒を解いたのである。肝臓からは何か漸々に取り去られるやうに覚えた。同時に疲労と、空腹とが交々至る。（一七五頁）

訳本：這時柴根便立起身来走至外間書房内，在那一個長椅子上横身坐下，心中怒氣已消。身上不覚疲労起来腹中又是飢餓。（三頁）（拙訳：この時、ザイキンは立ちあがり、となりの書斎に行って、長椅子の上に寝そべると、怒りはおさまった。疲労と空腹が感じられる。）

〈分析〉底本では、例3と呼応して、「肝臓からは何か漸に取り去られるやうに覚えた」というイメージ化した表現によって、ザイキンが怒りをおさめる心理的過程を表現している。訳本では、これが削られている。

【b 添加と更改】

【例5】ザイキンが別荘に帰り、息子を見出す場面

底本：ベエチヤと云ふ六歳になる男の子が唯一人、①大きい音を為せて鼻を啜り、下唇を突出して、骨牌のダイヤの兵卒を、剪を以て切抜いてゐた。②「お父様かい！」子供は振向きも為ずに、「お出でなさい！」。（一七〇―一七一頁）

訳本：一直到了臥房内纔見他六歳的児子坐在燈下，①歪著嘴唱歌手内拿著剪刀将一張兵卒的紙牌剪那兵卒剪下来，②見了柴根進来便叫道，阿父来了。（二頁）（拙訳：寝室でザイキンは六歳の息子を姿を眼にする。明

かりの下に座り、口を歪めて歌を歌いながら、鋏で兵士のカードから、その兵士を切り抜いている。入ってきたザイキンを見ると、すぐ「パパ、お帰りなさい」と叫んだ。）

〈分析〉①について、底本では、息子ベエチヤは「大きい音を為せて鼻を啜り、下唇を突出して」いる、全くだらしがない人物像である。しかしながら、訳本では、それが「歪著嘴唱歌」と書き換えられたため、息子が生活への情熱に溢れた活発で明るい少年に変化した。②の底本では、息子は珍しく帰ってきたお父さんに振向きもせず、ザイキンに関心を払わないようである。ザイキンの「余計者」イメージはここで強調された。これに対して、訳本において、「見…便」（みるとすぐ）という接続語を使うことによって、息子が父親に会ったときの興奮や愛情が描き出され、ザイキンの「余計者」イメージが弱化されている。

【例6】帰ってきた妻が友達にご馳走をするため、ザイキンにお金を要求するが拒否される場面①

底本：「用が有るのですよ！お茶でも飲んでから、もう一度役を為て見たり、歌つて見ることもあるのです……私はコロムイスロフと合唱をするのですがね……忘れなけりや可いが！で、貴方ねえ、何卒お願ひですから、ナタリヤにサルヂンと、ウオトカと、チイスと、其から何か他の物を少し許り取りに遣って頂戴な、彼の人達は屹度晩餐を食べて行く意だと思ひますから、ね、……あゝ疲れた！」（一七九頁）

訳本：奈坻克道，請他們来自然有事的，你快喝了茶我們再做戲你看，唱歌你聽…你看我和克劳五合唱一曲真是好的…我休忘了你快替我分付那脱利買了些鶏魚牛肉等類我要請他們吃夜飯的……呀乏了乏了今日我真的乏了。（四頁）（拙訳：ナデジタはいう。彼らに来てもらったのはもちろん用があるからなの。あなた、早くお茶を飲んでください。その後、私たちは演劇をしてあなたにみせる、歌を歌ってあなたに聞かせる。ほら、見て、あたし、コロムと合唱するととてもいいのよ。…忘れたら大変。はやくナタリヤに肉や魚などを買わせて下さい。彼らに夜食をご馳走するの。…ああ、疲れた疲れた、今日は本当に疲れた。）

〈分析〉底本では、妻は珍しく帰ってきた夫に興奮、愛情など一切示さない。それどころか、夫にお金を求めて友達に夜食をご馳走したが、ザイキンの食事には関心を寄せない。食後、妻はまた歌の練習に夢中になり、主人のザイキンを「余計者」扱いする。それに対して、冷血は翻訳する際、漢字の「你」（あなた）を添加した。その結

果、「做戯你看，唱歌你聴」のように、妻は全ての活動にザイキンを参加させようとするのである。底本にはない夫への愛情と自分の演出を見てもらえる喜びがここから読み取られる。訳本では、妻がザイキンに対する態度が改変されたため、ザイキンの「余計者」イメージが弱化されている。

【例7】帰ってきた妻が友達にご馳走をするため、ザイキンにお金を要求するが拒否される場面②

底本：「だつて困るぢやありませんか、ねえ貴方、那様ことを言はないでさ……具合が悪いぢやありませんか、恥を掻かせないでも可いでせう、ね！」三十分程過ぎて、ナタリヤは町にウオトカと立食の二三種を買ひに遣られる。ザイキンは茶を呑んで、仏蘭西パンを一つペロッと食べて了つて、旋て寝室に行つて寝台の上に横になる。（一七九頁）

訳本：奈坻克道，這却叫我為難了，你想你這様説時我如何好出去見他們，豈不教我羞死了人麼。①我平時何等替你做面子，你到這様。柴根默然不語。過了三十分鐘那脱利己從村市上回来，買了両三種食物，厨上茶也烹好了。②奈坻克於是取了一杯茶幾片法国麺麭送至柴根面前。柴根喝了茶吃了麺麭，心中不快，便走至裏間房内横身床上。（五頁）（拙訳：ナデジタは言う。それでは困るのよ。あなたがそんなことを言ったら、あたしは彼らに会わす顔もない、恥ずかしくてしかたがない。いつも、あなたの面子のために、いろいろとしてあげているのに、あなたはかえってそんなことを言うなんて。ザイキンは黙り込む。三十分ほどすると、ナタリヤが二三種の食べ物を買ってきた。お茶も入れた。ナデジタはお茶とフランスパンを何枚か取って、ザイキンの前に持ってきた。ザイキンはお茶を飲み、パンを食べると、胸中が不愉快で、寝室に行き、寝台に横たわる。）

〈分析〉底本では、拒否された妻は散々と言えるほどザイキンを責めている。また、召使が立食を買ってきてから、妻は友達と一緒に食事するが、ザイキンは自分一人だけでお茶とパンを晩飯として食べる。余計者のイメージがいっそう強化されている。訳本には、底本にはない①と②という、冷血独自の内容がある。この添加によって、妻のイメージが夫に不愛想で、わがままであつかましい女から、夫の体面を守るため気を配り、夫の食事の世話も行き届いている良妻に改変された。

【例8】妻が友達を寝室に泊めるため、既に寝ているザイキンを起こす場面

底本：ザイキンは一時間許り経て、ナデジタ、ステバアノウナの声を聞き付けた。「お泊りになつても宜しう御座いませう（略）」忽ち其所にナデジタ、ステバアノウナが顕はれる。「貴方、もうお眠み遊ばしましたか？」と彼女は問ふた。「うむ……何んだ？」「貴方ねえ、何卒あの書斎の方の長椅子に行らしつて眠んで下さいな、」（一八〇―一八一頁）

訳本：又過了一点多鐘，甘露嬢又在那邊説道住在這裏有什麽不好。（略）忽然房門開了奈坻克已走進房来，①軽軽地叫著柴根道你已睡好了麽你已睡好了麽。②柴根怒道不睡好還有什麽事。③奈坻克道休要動氣，請你今夜到書房裏去睡罷。（五頁）（拙訳：又一時間ほど経った頃、カンロ嬢はまたそこで言う。「ここに泊まっても悪くはないでしょう。」（略）忽ち寝室の扉が開き、ナデジタは入ってきた。「あなた、寝てらっしゃるの、寝てらっしゃるの。」と軽くザイキンに囁く。ザイキンは怒り出して、「いや、またなんだい。」ナデジタはいう、「怒らないでね、今夜、書斎に移って寝て頂戴。」）

〈分析〉底本では、すでに寝ているザイキンを起こし、劇場の友達を泊めようとするのは妻（ナデジタ、ステバアノウナ）である。それに対して、訳本では、友達を泊めようとするのは妻ではなく、友人の甘露娘に書き換えられた。そのため、ザイキンを起こすことは妻の主体的な行動ではなく、やむを得ぬ行動となる。また、底本におけるザイキンは疎外されても、不愉快と感じても何も言わず、現実に対していかにも無力な人である。訳本では、①と③の加筆によって、妻のザイキンに対するすまない気持ちと愛情を表し、妻の夫への態度を冷淡から愛情のあるものへと改変した。また②の増加により、ザイキンは無力な余計者から、自我を強く主張する家庭の主人に変えられた。

【例9】ザイキンが書斎に移って寝る場面

底本：「お父様、あの奈何して蚊は眠らないの？」とベエチヤは問ふ。「其りや……」と、ザイキンはぶつぶつ言ふ。「其りや何さ、お父様と貴様は余計者だから……なあ、睡る所も無いのだわッ！」（一八二頁）

訳本：（息子いう―筆者附）為什麽那蚊蟲不睡覚的。柴根歎了一口氣説道那是……那是和你阿父相似要睡也没有

的所在。（六頁）（拙訳：息子は言う。「どうして蚊は眠らないの。」ザイキンは溜息をついて言う。「それはだね……それはパパとお前と同じで、寝ようとしても眠る場所さえないんだろうね。」）

〈分析〉底本の結末には、「お父様と貴様は余計者だから」という嘆きが出てくる。これはタイトルと呼応して的を射た、小説の主旨文といえる。訳本はこの一文を削除した。それは冷血が「余計者」という主題を否定したと理解しても構わないであろう。

以上の比較を通して、冷血訳『生計』と底本との違いをまとめておく。いうまでもなく、テーマの「余計者」はザイキンのことを指している。下等文官であるザイキンは、金銭の負担を背負って、社会的にも家庭的にも疎外されている知識人である。生活に不満、不安を感じているが、反抗力と行動力に欠けているので、現状を打ち破ることはできず、精力のはけ口も見つからない。結局、憂鬱の運命を背負って、穏和で従順な余計者として、退屈な日常を過ごすほかはない。小説には抒情的な景色描写とイメージ化された心理記述がたくさんある。ゆえに、これは軽い陰翳がただよう感傷的な作品となる。

すでに明らかなように、冷血は翻訳に際して、原文の伝えるイメージを大きく変えた。まず、訳本は人物の心理描写と風景描写を多く削除した。そのため、訳本には底本の有した抒情的な雰囲気と隠喩の意味を失った。次に、底本では、ザイキンの「余計者」イメージは妻と息子の自分に対する態度の描写によって描き出されている。ところが、冷血は妻と息子のザイキンに対する無愛想な態度を愛情のある態度に改訳したために、ザイキンは家族に無視される疎外者から愛される人に変化した。最後に、底本の結末に出てくるザイキンの嘆息は、小説の主題を際立たせて、テーマ小説として受容される作者の意図がここから見える。しかし、冷血の訳本において、この一文が削られた。前述した内容と併せて考えると、その削除はおそらく誤訳、欠落ではなく、意識的にザイキンの「余計者」イメージを弱化、否定しようとする冷血の意識的な作業と言えよう。

これらの一連の改変を通して、訳本の『生計』は、『余計者』とは全く異なる新たな小説として訳者によって意図的に訳出されたのであろう。訳本の主人公ザイキンは底本との共通点は、お金にゆとりのない生活に疲れた知識人という点だけである。これは『余計者』のテーマとはずいぶん離れているが、『生計』というタイトルにはむしろ相

応しいと言えよう。つまり、冷血は知識人の内面世界に力点が置かれる「余計者」小説を、彼らの生活苦に焦点化した作品に改訳した。では、冷血が改訳した原因は何であろうか。章を改めて考えてみたい。

三　『生計』改訳の原因

翻訳は時代や社会背景と密接な関係があり、その時代の影響を受け、社会背景によって異なる特徴を呈する。『生計』と『余計者』の受容の違いを検討するには、その答をまず翻訳当時、中日両国の社会環境、文学背景に求める必要があると思う。ロシア文学が明治、大正期の作家に多大な影響を与えたことは言を俟たないが、特に「余計者」文学は日本の作家たちに魅力的に感じられた。

（1）社会・文学的背景

明治二十年、二葉亭四迷は『浮雲』を世におくった。この小説は知識人の「内面的な苦しみと動揺」、「実行力に乏しい知識人の近代的性格をはじめてみごとに解剖した点が重大で」[5]、日本本国の「余計者」小説の最初作と位置づけられる。その後、森鴎外の『舞姫』（一八九〇）、明治四十年代の夏目漱石による三部作や自然主義の作品なども引き続き、知識人の苦悶は日本文学の中心的なテーマとなった。

一方、日露戦争前後から、ロシア文学に対する関心が高まってきた。ロシア文学は、主に二葉亭四迷の訳によって、ツルゲーネフ、ゴーリキー、ガルシンといった主要な作家たちが紹介されており、明治三十五、六年ごろから、チェーホフが盛んに翻訳され、親しまれてきていたが、「余計者」文学はすでに相当多くの影響を与えていた。明治三十年代、「余計者」の代表作、レールモントフの『現代の英雄』（一八四〇）とツルゲーネフの『ルージン』（一八五六）が小金井喜美子、二葉亭四迷によって、それぞれ『浴泉記』（一八九二）、『浮き草』（一八九七）として翻訳された。それらが、日清戦争の「戦後の日本の、敗残に近い生活をいとなむ小市民的な知識階級の同感を引い」て[6]、若者たちに衝撃を与えた[7]。ことに『浮き草』の主人公ルージンの感化力は大きかった。島崎藤村や田山花袋ら明治文学家たちはルージンを愛読した若き日を振り返って、次のように述べている。「若かった日の友達仲間でツルゲネ

エフの愛読者でないものは無かったくらゐ」[8]、「五六人集ったある席上で、何ういふ拍子か、ふと、魯西亜の小説家イ・エス・ツルゲネーフの作品に話が移って、ルウヂンの末路や、バザロフの性格などに、いろいろ興味の多い批評が出たことがあった」[9]。彼らは自作の小説の中に同種の人間たちを多く登場させることになる。例として挙げられるのは花袋『蒲団』で、時雄は自分を「余計者」になぞらえる。「恋、恋、恋、今になってもこんな消極的な運命に漂わされて居るかと思うと、其の身の意気地なしと運命のつたないことがひしひしと胸に迫った。ツルゲネーフのいわゆる superflous man! だと思って、其の主人公の儚い一生を胸に繰り返した」[10]。

ほとんどの作家が「余計者」の姿に陶酔していた明治、大正期の日本と違い、同時期の中国文学は全く違う様相を呈していた。日清戦争の敗戦は清国の人々に多大なショックを与えた。その後、種々の救国救民運動が実行された。一八九八年、維新変法が失敗に終わり、日本に亡命した梁啓超は日本の政治小説『佳人奇遇』に触発され、「小説界革命」を唱え、国を救い、民衆を目覚めさせる道具として小説の効用を強調した。小説が革命鼓吹、社会弊害の風刺、国家の建設といった功利主義的小説観には注目したものの、知識人の内面への観照といった面にはまだ気づいていなかった。

近代中国で最初に翻訳された「余計者」小説はレールモントフの『現代の英雄』である。しかし全訳ではなく、原作の第一部分「ベーラ」を選訳し、『銀鈕碑』（一九〇七）と改題した上で「言情小説」として発表したのである。これは当時、訳者呉梼に「余計者」文学の類型意識がなかったということを表している。次に翻訳されたのが冷血の『生計』（一九〇九）である。前述したように、これも「余計者」イメージを正しく伝えていない。一九二一年、各作家のロシア文学に対する批評をまとめた『俄羅斯文学研究』が出版された。そこに収められた「近代俄羅斯文学底主潮」という文章に、「余計者」がはじめて現れ、「多余者」と訳された。しかし、文章はその言葉に触れるだけにとどまり、詳しい説明、作品と結びついた分析などは一切なかった。他の文章では、同種の人物を指す時に、「忏悔的貴族」等の言葉を使うことからみれば、「余計者」文学は当時まだ認められていない[11]。一九二四年、郁達夫はツルゲーネフの『余計者の日記』を『零余者的日記』として翻訳した。これをもって、中国における「余計者」文学の本格的な受容は始まった。

つまり、中国では、「余計者」文学が一九二〇、三〇年代になってはじめて受け容れられたのである。それは、「余計者」の描いた内容が五四文学の求める知識人の内面の声および個人の自覚と合致しているからであると考えられる。二十世紀初頭の中国において、知識人は革命鼓吹、社会弊害の風刺、国家の命運に情熱を傾けており、「余計者」文学を認識、理解する社会条件と文学背景が成熟していなかった。ゆえに、一九〇九年『余計者』に出会った冷血は作品のモチーフを十分に理解できなかったと推測できよう。

（2）冷血自身の文学転向

「生計」は字面の通り「暮らしを立てるための手だて」と云う意味である。「余計者」の趣旨を理解しなかった冷血はなぜこの小説の「生計」という点にテーマを求めたのだろうか。これは冷血自身の翻訳題材の変化に関係があると考えられる。冷血の翻訳小説は一九〇九年を境に、大きな変化を見せている。ここでは便宜的に、一九〇九年以前を前期、以降を後期と称する。

前期の翻訳小説の代表作として『遊皮』『三縷髪』『美人狩』『食人会』『巴黎的秘密』『白雲塔』『新蝶夢』『虚無党奇話』等が挙げられる。「陰狠」「激急」「曲折変幻」[12]と自ら評す『遊皮』、「思想変幻層出不窮」「起伏有線」[13]と評された『三縷髪』、又「妖怪」「美人」「妖巧」「侠客」[14]等をすべて網羅する『美人狩』はいずれも不思議な探偵物語である。『食人会』、『巴黎的秘密』はそれぞれ人食い事件、父親の伯爵と長年離れ離れで乞食になった娘の経歴を取り扱う「世界奇談」であり、『白雲塔』『新蝶夢』は妖怪、侠客、変容術などが混じった現実にありえない奇想天外な筋立てである。そして『虚無党奇話』は「奇話」の示す如く、劇的な変化に富むストーリーである。また、冷血は一九〇四年に小説専門誌の『新新小説』を創刊し、主筆として活躍した。『新新小説』も冷血の前期小説の主な掲載誌となった。創刊号から開設された欄目「世界奇談」に、冷血の書いた序文がある。

（前略）天下之境無儘止，天下之好探境者亦無儘止。我願捜索世界之奇境異境，以與天下好探新境者共領略。我乃佐采譯世界奇談。（拙訳：天下の境地は果てがない。天下の境地の探究を好む者も無数である。私は世界の奇怪、怪異な境地を捜索し、これを以て天下の新境地を探索することを好む方々と共に体験したいと願っている。そこで、私は世界の奇談を採録して訳すのである。[15]

冷血は小説理念に関する文章を多く書き残さなかったため、この文章は同時期の冷血の小説観を理解する上で重要である。序文に見えるように、世界の奇怪な物語を網羅し紹介することを冷血は求めていたのである。同時期の小説はその内容から見て、この目標に相応しいと言えよう。これは当時の中国小説界が求めていた趣味と一致しており、読者を魅了し高い人気を博した要因の一つでもある。

一九〇九年以降の翻訳小説は前期とは異なる。主人公は王族淑女から平凡な一般人に変り、乞食、下級役人、芸能者、破産商人などが主役として小説の舞台に登場し始める。例えば、乞食女の苦しい生活と高潔で屈しない情操を描写した『乞食女児』、破産の迫っている銀行経営者を主人公とした『破産』、街頭の芸能者に注目した『売解女児』等があげられる。虚無党（ニヒリスト）小説は冷血の翻訳生涯を貫く小説類型であるが、一九〇九年以前の翻訳は虚無党党員になるまでの境遇の変化に焦点を絞っているのに対して、以降の『爆裂弾』『女偵探』などはいずれも党員たちの行動を読者に供している。つまり、前期の小説は波瀾に富んでいる奇抜なストーリーを旨としたが、後期の翻訳は淡泊な筆致で生活の一断面を描くことに重点が置かれていることが分る。一九〇九年に創刊され、冷血が主筆を務めた『小説時報』は冷血の後期の翻訳小説の傾向を示している。『新新小説』が「奇談」「侠客談」を主としたのに対して、『小説時報』が取り上げるのは、乱世に生きる各階層の人々の幸福や苦難、様々な境遇である。『生計』は一九〇九年の『小説時報』第二期に訳載されたものである。この年に、冷血による翻訳は合計で十一部ある。『吸煙会』のような新聞記事を除けば、真に小説と言えるものは下記の七部があげられる。

①俄国之偵探術（『小説時報』第一期、一九〇九年九月一日）
②科学偵探（『時報』、一九〇九年九月十九―二十六日）
③俄帝彼得（『小説時報』第一期、一九〇九年九月一日）
④生計（『小説時報』第二期、一九〇九年十月一日）
⑤火車盗（『小説時報』第二期、一九〇九年十月一日）
⑥空中飛板（『小説時報』第三期、一九〇九年十一月一日）
⑦怪美人（『小説時報』第三期、一九〇九年十一月一日）

①はロシアの探偵と腕を競う虚無党の活動を書く虚無党小説。②は科学の技術を使って殺人事件を解決する探偵小説。③が描いたのは当時の社会風潮を反映し、浪費そして女性との社交に夢中になる文官たちの話、民衆の生活に関心を寄せ、現実性が強い。⑤は生計を立てるため、列車を強奪する強盗の話。⑥は山で狼と遭遇し、板を利用して自分を救うある猟師の話。また、この時期に冷血は中編小説『商界鬼蜮記』を創作した。この小説は商人、普通の市民を主役にして、清末の社会における人々の生存の実態を念入りに描いている。ここから、冷血が清末当時の商業界の苦境、人々の苦しい生活に対する深い同情が窺える。

総じて言えば、一九〇九年以降、冷血の翻訳は国民の現実生活に注目するようになった。特に一九〇九年頃、人々の商業活動、日常生活は冷血の翻訳、創作のテーマになる。そうした意識が念頭にあった冷血は『余計者』の翻訳において、金にゆとりのない下級知識人の生活苦に焦点を絞り、原作を改訳したのであろう。

結　び

常に日本の文学界に関心を寄せ、情報をいち早く獲得していた冷血は、新聞社の利便を使い、一九〇八年に刊行された瀬沼夏葉訳『露国文豪：チエホフ傑作集』をいち早く入手した。そして瀬沼訳のわずか一年後には、『生計』を中国の読者に供した。だが二十世紀初頭の中国では、「余計者」文学を受け容れる準備が整っておらず、また冷血自身も国民の生計に意識が向いていたため、結果的に、「余計者」という主旨がつかめず、削除、修改等を通して原作の「余計者」の主題を改変し、知識人の内面苦を表す小説を生計苦を描いた異なる小説として訳出した。結局、冷血訳『生計』は、「余計者」文学およびチェーホフのイメージを当時の読者に十分に伝えるには至らなかったのである。

注

（1）郭延礼『中国近代翻訳文学概論』（湖北教育出版社、一九九八年、二九五頁）を参照。

（2）張艶「陳冷血両篇翻訳小説的日語底本」（『清末小説』、第三五終刊号、二〇一二年、一四六頁）
（3）川端香男里『ロシア文学史』（岩波全書、一九八六年九月）、藤沼貴、小野理子、安岡治子『ロシア文学案内』（岩波書店、二〇〇六年）を参照。
（4）ここの「上」（乗る）は「下」（降りる）の誤植と考えられる。
（5）、（6）吉田精一『現代日本文学史』、筑摩書房、昭和三十八年九月、二四頁―二五頁、六十頁。
（7）奥村剋三・左近毅編『ロシア文化と近代日本』、世界思想社、一九九八年六月、五三頁。
（8）島崎藤村「ルウヂンとバザロフ」（初出：「雄弁」、大正九年三月）、『島崎藤村全集九巻』、筑摩書房、一九八一年、二四五―二五二頁。
（9）田山花袋「重右衛門の最後」（初出：明治三五年、『アカツキ叢書』第五編）、『国木田独歩 田山花袋集』、筑摩書房、一九八〇年五月、三二三頁。
（10）田山花袋「蒲団」（初出：「新小説」、明治四〇年九月号）、注9前掲書、三五八頁。
（11）『俄国文学研究』に収める「十九世紀俄国文学的背景」、「近代俄羅斯文学底主潮」（『小説月報』第十二巻号外、一九二一年九月）等の文章を参照。また、五四以降、ロシア文学史に関する著作が二部出版された。それは一九二四年の鄭振鐸による『俄国文学史略』と、一九二七年の瞿秋白・蔣光慈の執筆した『俄国文学史』である。前者では、「余計者」の代表作品を紹介したが、「余計者」という用語を使わず、類型と見做していない。後者では、「多余的人」という言葉を使って同種の小説を分析した。
（12）冷血訳「遊皮」訳者付記、『偵探談一』、有正書局、一九〇三年。
（13）冷血訳「三縷髪」序、『偵探談三』、有正書局、一九〇四年。
（14）冷血訳「美人狩」序、『偵探談四』、有正書局、一九〇四年。
（15）冷血「世界奇談」序文、『新新小説』第一年第一号、一九〇四年八月一日。